

3. 離島の未来を築く「島留学」の支援活動

千葉 勝吾

①活動の目的

伊豆大島は東京の南120kmの太平洋上に浮かぶ都下最大の火山島であり、伊豆諸島のなかで最も多い人口約9千人の人口を擁している。しかしながら、少子高齢化と人口減少は進行しており、島民の人口増は大きな課題である。



元町上空から三原山を望む

大島高校もかつては定員を超えた受験生が応募し不合格者を出したこともあったが、現在では0.5倍といった応募倍率で、定時制に至っては1学年30名の募集定員に対して島内からの入学希望者は数名あるいは希望者なしといった状況が続いていた。

そのような状況に対する対策として、平成20年より定時制が独自に取り組んだのが、内地から自立を目指した若者に大島に「島留学」してもらうことだった。しかし、本来の定時制高校は若者の自立にあるものの、島に一人で住み就労しながら就学することは容易ではない。

そこで、本活動は島の夜間定時制に「島留学」してきた若者に対して、自立への支援や援助を島民の方々と協働しておこなうことを目的とする。

具体的には、第一に口コミが主体の島の中で住居の確保や就労先の情報などを提供することにより、生活の基盤をつくることを支援し生活上の自立を目指す。

第二には、若者特有の悩みや家族間の問題などについての相談活動をおこない精神上的自立を目指す。

第三には、島に対して島民に協力して社会貢献活動する機会を提供し参加を奨励、島の振興に寄与できる若者を育成することを目的とする。

島留学の状況

平成21年に第1期生を迎えた大島高校の島留学は、平成23年4月現在では在籍する生徒25名中の12名を数えるまでになり、島に定着を果たしている。その一方、人数が増えるにしたがって、住居、就労といった学校外での生活支援の課題が問題となってきている。

②活動の概要

活動1 島留学生を中心とした就労及び生活の支援

○ 島内事業所訪問による就労先開拓

平成 21 年 4 月に島留学の 1 期生 5 名が島にきて以来、島内の事業所を数箇所づつ巡回しながら、定時制の若者の雇用をお願いしている。

その結果、従来はスーパーマーケットなどでのバイトなどが主な就労場所だったものが、建設会社 2 社、製塩会社 1 社、船会社 1 社のほか福祉施設、飲食店、葬儀社な雇用してもらえる事業所を増加させることができるとともに、島内を巡回していることが町長の耳にも入り、町役場の非常勤職員の採用について、町長から直接電話で依頼が来るといった成果をあげることができた。



○ 居住場所の確保

大島は島外への人口流出の結果、空家が多くあり、かつての離島ブームが去り廃業した民宿なども多く住むところには不自由ないかに思えるが、不動産を賃貸するという文化なく、専門の不動産屋さんもない状況であった。

そこで、民生委員や保護司といった地元の情報通をまわり、1軒の廃業民宿を借りることができた。また、その後も民宿の長期滞在の申し出など住居の提供についても情報が集まるようになった。

○ 島民の協力者の開拓

島留學生が最も多く就労している建設会社では、社長をはじめ現場主任、中年女性の作業員の方々が生徒たちのことを自分の子どものように面倒を見てくれている。そこで、とくに現場主任とは日常的に連絡をとり、生徒の状況について情報交換をおこなうことで、よりキメの細かいケアができるようになるとともに、交流イベントについて助成金による支援をおこなった。

○ ジョブカードキャリアカウンセラー

ジョブカード制度では、若者の積極的な雇用に向けて事業所に補助金が支出されるが、大島にはその認定をおこなうジョブカードカウンセラーが存在しないので、内地にて講習を受講して資格を取得し、大島町商工会を通じて全事業所にパンフレットを配布するなど島内で制度の普及をおこなった。

活動 2 心のケアと精神的な支援

○ 悩みごと何でも相談の実施

島内で活動する NPO 法人フリースクールまいまいの理事長であり、カウンセラーでもある鴻池友江にお願いして、定時制の生徒を中心とした茶話会を実施して、子どもたちが気楽に話せる雰囲気の中かで悩み事相談をおこなった。

回数	実施月	実施内容
1	22年10月	教員の主導でスタートしたが盛り上がる。6名参加。
2	22年12月	クリスマス会をかねて実施。8名が参加し時間超過。
3	23年2月	進路について語り合いそれぞれが展望をもつ。7名が参加。

○交流レクリエーションの実施

島留学してきている子どもたちは、昼は就労し夜は10時近くまで学校で勉強をしているので、帰宅すると寝るだけといった日常を過ごしている者が多い。また、年齢的に車の運転免許は取得できないし、バイクの免許も持っている者も限られているので、島の中を自由に移動することもできないので、案外、島内も観光スポットなどについていない。

具体的には、季節ごとに「海岸での釣りバーベキュー大会」「山遊びとして山芋掘り大会」「三原山トラッキング」「伊豆の踊り子のふるさと波浮港の観光」などをおこなうとともに、独り住まいしている生徒の家をまわり順番に夕食会を開くなどして、定時制に集うすべての生徒が仲良くなりように努力しました。

活動3 社会貢献活動により大島の島づくりに寄与

○島内イベントへの参加

大島は島内が6地区に分かれており、地区毎に小さな頃から祭礼や盆踊りなどのイベントを通じて地域の絆を深めてくるのだが、島留学してきた生徒にとっては、そのような機会に参入することはなかなか難しい状況があった。

そのなかで、夏まつり、縁日、福祉施設のつどいなど、オープンなイベントに島留学してきた生徒を積極的に参加させて地域との連携を深める活動をおこなった。

具体的には、大島の郷土料理であるべっこう漬けをヒントに新食材「べっこうなげつと」を開発し、夏まつりや縁日に模擬店を出店し島民の方々へ紹介をおこなった。

また、福祉施設のイベントである恵み園めぐみまつりでは、そのためにバンドをつくり練習を重ね施設の方々へその成果の発表をおこなった。この機会を通じて、恵みの園からアルバイ



べっこうナゲットの販売



めぐみまつりでのバンド演奏

ト雇用の申し出があり、アルバイト採用につながった。

○移動図書館へのボランティア参加

大島には図書館が1館あるものの建物、蔵書とも老朽化が進んでおり、図書館の建て替えが要望されている。また、とくに小さな子どもにとってはみじかな場所に図書館がないので本に触れる機会が少なかった。

そのため、21年12月に日野市から移動図書館用の車を譲り受けたのを機会に、移動図書館ひまわり号の活動がはじまった。



移動図書館ひまわり号

22年7月からは、島留学してきた生徒を中心に、移動図書館のボランティアをおこなうことになった。とくに毎週水曜日は、島留学してきた生徒たちと教員だけで移動図書館が実施されることとなり、生徒たちの意識の向上がみられることとなった。

○学童保育「わいわい」へのボランティア参加

22年10月からは、NPO法人フリースクールまいまいが運営している学童保育「わいわい」の活動に島留学してきた生徒がボランティア参加することとなった。

学童保育がおこなわれる午後の時間帯は、全日制では授業時間帯なので高校生は参加できないので、定時制の生徒は貴重な存在である。小学生にはお兄ちゃん、お姉ちゃんと人気で、異年齢による交流がおこなわれた。

③決算報告書

収入	大同生命厚生事業団助成金	100,000-
支出	ガソリン代(島内活動用)	27,689-
	謝金(指導者、相談者などへ)	19,095-
	通信費(郵券、通話代など)	22,150-
	消耗品費(文具、用具代など)	20,215-
	資料費(書籍や資料など)	13,268-
	合計	102,417-